

く、徹底的に科學的研究の立場に立つて攷究し、判断を加えねばならぬ。このような用意は誰もが心得ているところであるにかかわらず、その見解において互に異るところの少なくないのを見ると、かかる問題の解明が如何に複雑で困難であるかの一端を證示するものということが出来るであろう。

從來公けにせられた諸説は、それぞれ尊重すべき深い研究の結果に成つたものであるが、なお望蜀せらるべき餘地は、當代文化發達の根源となつた隋・唐文化の奥底を探究している人々によつて、多少ともに補正を期待し得べき點に存するではなからうか。勿論從來とても、これが閉却せられてあつたのではないが、この方面の研究は、近時益々進境を示し、當面の問題に關しても、新たに寄與すべき論考の發表せられたもの少なしとしない。そこで自分はこの數回にわたる講演を、主として中國文化の考究に従事しながら、それがわが國におよぼした影響についても、不斷の注意を拂つて來られた諸氏に委囑し、本會の目的を達成することにしたと考ふるに至つた。本集（飛鳥奈良時代の文化・全六講）にその論述を収載した五氏（神田喜一郎・森鹿三・塚本善隆・梅原末治・藪内清）は、あらためて紹介するまでもなく斯學の權威として知られる人々で、こうした立場において從來の諸説を検討しながら、その透徹した史眼に映じたところを要約して講述せられたのであり、自分もまたその前座として總括的の演述に當ることとした。もしこの一連の講演が、本會を發起せられた人々の意圖に副い得るならば幸甚である（昭和二十九年秋）。

始めに標題の『飛鳥奈良時代』という名稱について、一應おことわりをしておきますが、私はここでは便宜上、飛鳥方面に都の置かれていた時代をばひつくるめて飛鳥時代と呼び、奈良に都を置かれた時代をば奈良時代と呼ぶことにいたしたいと存じます。そうしますと、推古天皇が飛鳥のあたりに都を定められて（五九二年）から、元明天皇が和銅三年（七一〇年）に奈良を都と定められるまでが、ひつくるめて飛鳥時代であり、それから桓武天皇が延暦三年（七八四年）に、京都の近くの長岡に遷都されるまでの七代の天皇の間が奈良時代ということになります。